

平成27年度「全国学力・学習状況調査」における 大蔵 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成27年4月21日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。
学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・ 身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・ 実生活において不可欠であり、常に活用できようになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・ 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・ 様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※ 本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されるような公表の方法については、配慮しています。

大蔵 小学校「平成27年度 全国学力・学習状況調査」の結果について

1. 教科に関する調査結果の概要

① 学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)結果

		国語A	国語B	算数A	算数B	理科
平成25年度	本市	60.3	46.3	74.6	56.5	
	全国	62.7	49.4	77.2	58.4	
平成26年度 (理科：平成24年度)	本市	69.1	52.6	76.2	55.4	59.7
	全国	72.9	55.5	78.1	58.2	60.9
平成27年度	本市	67.1	62.1	73.3	43.7	57.3
	全国	70	65.4	75.2	45	60.8

② 学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・読み取る力や言語についての知識・理解の定着が見られた。 ・書く力を問う問題に課題があり、書くことを習慣化する必要がある。
	よくできた問題	・登場人物の相互関係を捉える問題は、正答率が非常に高かった。
	努力が必要な問題	・具体的な事例を挙げて説明する文章を書く問題は、正答率がやや低かった。

国語B	全体的な傾向や特徴など	・国語に対する関心・意欲が高く、記述による解答にも粘り強く取り組むことができた。 ・文章を適切に読み取り、整理して表現する力が高まっている。
	よくできた問題	・文章と図とを関係付けて、自分の考えを書く問題の正答率が非常に高かった。
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じ、新聞の割り付けをする問題の正答率が他の設問と比較するとやや低かった。

算数A	全体的な傾向や特徴など	・「量と測定」「数量関係」の領域の正答率が高く、基礎・基本の定着が見られた。 ・計算力も高まってきているが、分数の入った計算は、やや苦手な傾向がある。
	よくできた問題	・グラフに表されている事柄を読み取る問題の正答率が非常に高かった。
	努力が必要な問題	・円の性質から三角形の等辺を捉え、二等辺三角形の性質から底辺の大きさを求める問題の正答率がやや低かった。

算数B	全体的な傾向や特徴など	・無解答率が全体的に低く、活用問題についても最後まで粘り強く取り組むことができた。 ・整数の性質についての理解が深まり、基礎的・基本的な知識を活用して応用できるようになった。
	よくできた問題	・切り上げた場合の見積もりの結果を基に、目標に達しているかについて判断する問題の正答率が非常に高かった。
	努力が必要な問題	・示された情報から基準量を求める場面と捉え、比較量と割合から基準量を求める問題の正答率が低かった。

理科	全体的な傾向や特徴など	・無解答率が全体的に低く、記述問題についても最後まで粘り強く取り組むことができた。 ・観察・実験を中心とした問題解決に取り組むことにより得られた理解について、知識・技能として確実に習得していると言える。
	よくできた問題	・振り子の運動の規則性を振り子時計の調整の仕方に適用できるかどうかをみる問題は、正答率が高かった。
	努力が必要な問題	・顕微鏡の適切な操作方法を選ぶ問題は正答率が低かった。

⑤ 学校における学習状況に関する調査結果の分析

・自分で課題を立てて情報を収集整理し、発表していく学習活動へ取り組んでいると答えている児童は、全国と比較しても多い。本校の総合的な学習の時間オンリーワン研究の成果である。一方で、自分の考えを説明したり文章に書いたりする活動は、抵抗感をもっている児童が多い。今後は、自分の考えを表現しようとする児童を賞賛したり児童自らが表現力の伸びを実感したりできるような指導を行い、児童が自信をもって表現活動に取り組めるようにしていく。

・授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと答えた児童は全国平均を上回っている。授業改善に取り組み、学習の振り返りの時間を確保してきたことで、児童が学びの深まりを実感し、学習内容の基礎・基本の定着に結び付いたと考えられる。継続して授業改善に取り組んでいく。

・理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと答えた児童が全国平均を下回っている。日常生活と関連付けながら実感を伴った理解ができるように、授業構成の工夫を図る。

2. 家庭生活習慣等に関する調査結果の概要

③ 家庭学習習慣に関する調査結果の分析

・1時間以上家庭学習をしている児童の割合は、改善は見られるものの全国平均と比べて低い。家庭学習で宿題やそれに伴う復習は非常によくしているが、自ら計画したり次の学習に興味をもって予習したりする児童は少ない。学校だよりや学級懇談会等で学年ごとの学習時間の目安や家庭学習の仕方を具体的に示し、家庭と連携して指導していく必要がある。

・児童の読書量は全国平均を上回っており、これまでの取組の成果が表れた。今後も毎週2回実施している「朝の読書タイム」を継続するとともに、学校図書館の充実を図り、読書好きな児童の育成に取り組んでいく。

⑥ 生活習慣等に関する調査結果の分析

・テレビ等への接触時間は増加傾向にあり、2時間以上利用している児童の割合が増えている。テレビゲーム等への接触時間も増加しており、家庭での生活習慣の改善を促していく取組が必要である。

・自分の考えや意見を発表することを苦手とする児童が、全国平均を上回った。また、学級会等の話し合い活動を通して、児童自らが学級や学校をよりよくしている意識が低いことも分かった。学級会や代表委員会、委員会活動等の特別活動をより活性化させ、児童が所属感、達成感をもつように指導を工夫していく必要がある。

・地域の行事に興味をもったり地域をよりよくしたいという思いをもったりする児童が増加してきている。本校が総合的な学習の時間オンリーワン研究で、児童と地域との関わりに重点を置いて取り組んできた成果が表れてきているものとみられる。今後も、生活科や総合的な学習の時間、道徳等の取組とも関連付けながら、年間を通しての指導の充実を図っていく。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組(全校・学年・学級・教科毎の取)

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

◎ 学力向上のための特設時間の実施

・朝自習の時間に、「読む力」の育成のために設定した「読書タイム」(週2回月・木曜)を継続する。また、「国語タイム」(週1回火曜)、「算数タイム」(週1回水曜)、「朝の学習タイム」(週1回金曜、各教科)も引き続き設定し、基礎基本の力の育成に努める。

・学力調査やCRTの正答率の低かった領域を中心に、アシストシートや計算ドリル等を活用した反復練習を徹底し、基礎基本の定着を図る。

・「小学校まとめ道場」(6年生対象、1・2月)、「実力アップ道場」(5年生対象11・12・1・2・3月)を実施する。国語・算数の過去問題やWEB問題等を積極的に活用し、応用力・活用力の向上を図る。

◎ 全国学力調査の過去問題、アシストシート、活用力を高めるワーク等の活用

・「国語タイム」「算数タイム」でアシストシートを、夏休みや冬休み、春休みの課題、「小学校まとめ道場」「実力アップ道場」等で過去問題やWEB問題、活用力を高めるワーク等を活用する。

◎ 言語活動の充実

・国語科では、読み取ったこと、感じたことを伝え合ったり、テーマを決めて話し合ったりする活動を学習に位置付ける。

・算数科では、自分の考えを図や言葉に書いて説明する活動を取り入れる。

・授業のまとめ(分かったことや感想、自己評価等)を自分の言葉で書き表す時間を確保する。

◎ 総合的な学習の時間・生活科の実践を通しての学力定着

・教科との関連を一層重視した学習展開を工夫し、教科等で身に付けた力を活用させる中で、学力の確実な定着を図る。

◎ ひまわり学習塾の実施

・学力向上リーダー・学習指導員と連携し、国語・算数を中心に3～6年生の参加児童の学力向上と学習習慣の定着を図る。(毎週月・木曜)

○ 特別活動の充実

・学級会や代表委員会を通して、自らよりよい生活を築くために合意形成をする話し合い活動や自分たちでルールをつくって守る活動をより一層重視する。

② 家庭生活習慣等に関する取組

◎ 宿題のスタンダード化

・1・2年30分、3・4年45分、5・6年60分を目安に取り組むように、学校だよりや学年・学級通信で保護者への理解を図る。

・自主学習ノートを活用して、自分の課題に応じた学習が計画的にできるようにする。

・「家庭学習チャレンジハンドブック」を宿題等で活用できるように呼びかけるとともに、毎月担任がチェックし、有効な活用を図る。

・夏休み・冬休み・春休みの課題として、活用力を高めるワークやWEB問題等を使ったプリント集を作成する。

・「北九州市家庭学習マイスター賞」に全児童が応募するように働きかけ、家庭学習への意欲を一層高めさせる。

◎ 全国学力・学習状況調査の課題と取組等を保護者へ周知

・学校だよりや学校ホームページで保護者に学校での学力向上の取組を伝えていくと同時に、学習習慣や生活習慣の改善に係わる啓発を継続して行う。

・学年・学級懇談会で学年や学級の課題と取組状況を説明し、理解と協力を得るようにする。個人懇談会では保護者と話し合っただけの個別の課題を明確にするのと同時に、学習習慣の育成等を家庭と連携して行えるようにする。

○ 小中が連携した学力向上・生活習慣の改善の取組

・中学校区小中合同研修会を開催し、児童生徒の学力向上・生活習慣の改善について協議し、共通理解を図る。

・小中連携サポーター講師が5、6年を中心に学習・生活指導を行い、学力向上や生活習慣の改善を図る。